

### 3-2 分銅からみる近世社会

玉井建也

#### 1、はじめに

生きている尺貫法と、その尺貫法で暮らしている老人や職人は困っているのだ<sup>1</sup>

上記は 1976 年に書かれた永六輔氏の言葉である。1959 年にメートル法に移行してから 17 年の歳月を経た時であり、「文化は守るものであっても、向上するものではないのではないか」という強い言葉でもってメートル法と尺貫法の併用を強く訴えている文章である。これを国粋主義的であると看過する、もしくは一つの時代性であるとしてしまうのは容易い。確かに「文化」は「向上するものではない」という意見には賛成であるが、決して「守る」ものでもない。変容していくものである。しかし、やはり時代とともに過去に対する視線もまた変化していく。

生活環境における道具や装置のあり方をみると、明治以降、急速に変化していくことになるいわゆる「伝統」的なものといわれるものは、それ以前からの長い歴史的経緯を持っているにしても、江戸期に一般化したものが少なくない<sup>2</sup>

上記の永氏とこの柏木氏の言葉との決定的な差異は、すぐ側にあるがゆえの緊張感があるかないかの差である。つまり 1970 年代においては遡及可能であり、身近に感

じられた一つの「文化」から、その遡及性が失われつつあるのが現代社会（2000 年代）と考えることができるかもしれない。ただ、その分水嶺を簡単に指摘することは出来ないし、より鳥瞰的な見方である「現代社会の諸特徴が形成されるのは、せいぜいここ二、三百年のことである」<sup>3</sup>という羽田正氏の言葉からしてみても、その二、三百年前に使用されていた分銅等の度量衡については確かに現代社会（それは決して 1976 年までだけではなく）において、地域性や認識する個人性等に大きく左右されるものではあるにしろ底流している。しかし、それは単純一筋の直線的歴史学で把握できるものではなく、連続と断絶との中で培われてきた複雑な様相を示すものである。その歴史性を捉えるための一試論として、本論考では重さという、様々な諸側面に存在する近世人の生活レベルにまで深く浸透している概念を取り上げることにする。

従来、国家史研究において分銅が取り上げられることは、ほとんどなかったといえる。度量衡が国家政策の基本となすという考え自体が極めて近代的な発想であることを踏まえても、総体的な統制と地域性との両方を捉える必要性は存在する。また、人間が生きて、生活している以上は、そこに基準となる度量衡が存在し、そして度量衡が社会の隅々までに（こちら地域性等に大きく左右されるが）行き届いているということもまた同時に考慮に入れていかなけ

ればならない。近世計量史研究においては宝月氏<sup>4</sup>、林氏<sup>5</sup>、小泉氏<sup>6</sup>、馬場氏<sup>7</sup>などの諸研究がみられる。そのほとんどが制度史的な分析に終始している中、馬場氏の論考においては伊賀国の分銅改めに着目し、村落の共同所持を指摘している<sup>8</sup>。ただし、伊賀国以外の村・町等での事例が未だ蓄積されていないのが現状である。

## 2、モノ資料としての分銅

今回、検討する分銅等の資料は後藤四郎兵衛家から東京大学考古学研究室に寄贈されたものである。3つの木箱に収められており、上から箱番号を1、2、3と割り振りをした(図0参照)。そこに収められている資料について本節では説明する。総数としては218点であり、分銅(正本・掛・千枚)や分銅関連器具(天秤用槌・鑄型・印判・試金石)などが見られる。

### a) 分銅

その中で最も重要視すべきなのは、「正本分銅」の存在であろう。既に馬場氏が指摘しているが<sup>9</sup>、「正本」(目録番号:3-3-1、3-3-2、3-2-1、3-1-1、2-7-1、2-4-4-1、2-4-3-1、2-4-2)、「極本」(目録番号:2-9-3、2-5-1)、

「本後藤」(目録番号:3-2-3)などの点刻が分銅の底面に刻まれている分銅が存在し



図1 (目録番号3-3-1)

ている(図1参照)。分銅改めを行っていたということが明らかになっている以上、何らかの基準となる分銅の存在を想定することは自然な発想である。これら一連の分銅がそうであるという確固たる史料等の存在がないため、即断はできないが、その可能性は極めて高いといえる。

また資料の分銅中、ほとんどを占めるのが掛分銅と呼ばれる市中に出回っていた分銅である。天秤の皿に乗せて、重量を計測する際に用いられたものである。その上面には「改」、「子」、「丑」、「寅」、「卯」、「辰」、

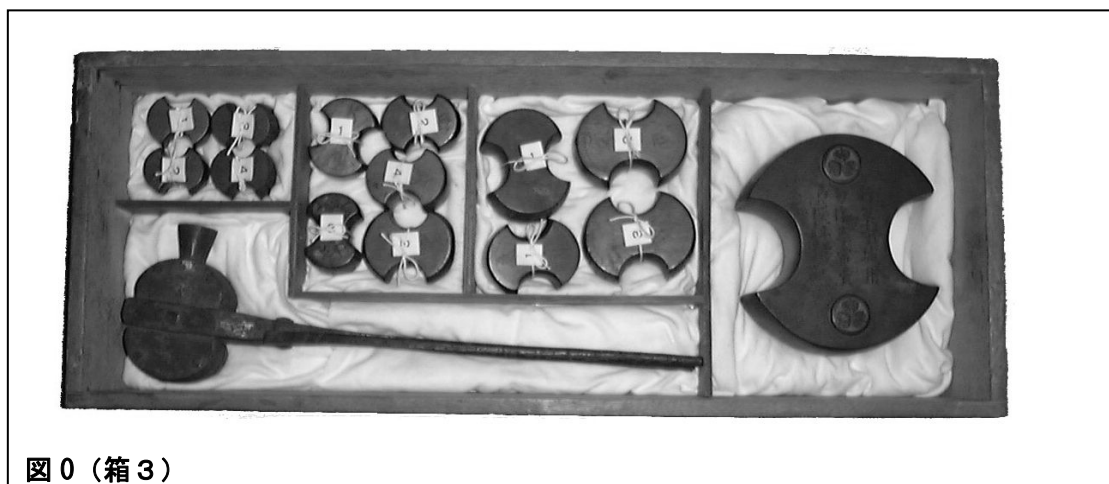


図0 (箱3)

「巳」、「午」、「未」、「申」、「酉」、「新」、「天」、「正」などが、底面には「極」、花押、「キ」、「二」などの文字が刻印されて



図2（目録番号3-2-4）



図3（目録番号3-5）

いる（図2参照）。恐らくは分銅改めの際に押されていたものなのであろう。また側面には磨耗の度合いを視覚的に示すため、もしくは偽造を防ぐために多数の桐印を打っていることもまた特徴的である。

それらの分銅とは別に千枚分銅もしくは金銀法馬と呼ばれる分銅が存在している。千枚分銅とは豊臣秀吉が戦という非常時に備えて作成したものであり、目的としては

軍資金を蓄えるというものであった。後藤徳乗に命じたのが最初で、その後、万治2（1659）年に金分銅20個・銀分銅5～20個、享保年間に金分銅3個・銀分銅5個、寛政5（1793）年に金分銅3個・銀分銅1個、天保13（1842）年には金分銅3個・銀分銅23個を作成している<sup>10</sup>。現在、後藤家から寄贈された資料には千枚分銅そのものは残されてはいないが、その模型が存在している（図3参照）。その上面には「行軍守城用、勿作尋常費 萬治貳年巳亥 正月吉日」と記されており、葵紋が上下に1つずつある。またそのほかにも款文を練習した石板もあり、そこには「吉日／征伐軍旅用勿為尋常費／寛政五年癸丑八月／ノ資蔵充軍資／人寶傳 泰平寶傳／天保十年一月／天保十三年壬寅十一月」と記されている。

#### b) 分銅関連資料

箱には分銅以外の資料も収められている。分銅を作成するための鋳型が一つあり、横から銅などの素材を流し込むようになっている（目録番号：3-4、図4参照）。この器具が存在していることは、江戸においても分銅製造が行われていたことを指し示している。また、それだけではなく、分銅改めの際に使用されていた試金石もある。布に包まれ、蓋・台座が据えつけられているもの（目録番号：1-13-1～1-13-4）があり、蓋には「金位監定本金 大判座 役所」と記されている。さらには箱を5つに区切り、そのうち2つに試金石が収められているものも存在する（目録番号：1-14-1、1-14-2）。また上記のような分銅に直接的に関わるものだけではなく、秤・天秤に関連するもの

も存在する。通称「かんかん（看貫）」と呼ばれるもので、天秤の微調整等に使用された槌である。これは 4 本が存在しており、2 本を一まとまりとしている（目録番号：1-8-2、1-8-3）。



図 4（目録番号 3-4）

その他、印判も多数収められている。鉄極印が 2 つあり（目録番号：1-10-1、1-10-2）、両方とも後藤家の花押が印字である。また木箱（目録番号：1-12-0-2）には 11 個の印判が収められており、そのうち 5 つが花押型印であり、木製である（目録番号：1-12-1～1-12-5）。残りの 6 つのうち 1 つは取手部分が兔をかたどっており（目録番号：1-12-6、図 5 参照）、残りは 10 代廉乗の印「光侶」（目録番号：1-12-7）、11 代通乗の印「光壽」（目録番号：1-12-10、1-12-11）、14 代桂乗の印「光守」（目録番号：1-12-9）、15 代真乗の印「光美」（目録番号：1-12-8）である。

#### c) 後藤宗家新出資料



図 5（目録番号 1-12-6）

その他、今回の調査で新たに明らかになった資料も存在する。後藤四郎兵衛家のご子孫である後藤照子氏より借用したもので、総数は 61 点である。分銅としては、底面に「本後藤」と点刻されたもの（目録番号：1）があり、その他、箱に収められたものが 19 点（目録番号：2-1～2-19）、そして分銅改めに使用されたのであろう試金石がある（目録番号：6-1）。その他、分銅だけではなく、大判座に関連する資料も存在し、大判の銅型（目録番号：3、4-1）、大判の刻印が打たれた金属製の板（目録番号：5）



図 6（新出資料 6-3-2）

がある。さらには金貨の型紙があり、五両判型紙（目録番号：6-3-1、6-3-2（図6参照）、二両二分判型紙（目録番号：6-3-3、6-3-4）があり、それぞれ墨書がされている。そのほかは銀貨・オランダ貨幣・銅銭等が散見される。

### 3、文献の中の分銅

上記のような分銅及び関連資料が近世社会においてどのように受け入れられていたのか。その点について、本節では文献史料を活用しながら考察する。

#### a) 分銅改め

まず、制度的な側面から分銅がどのような扱いをされていたのかについて考察する。この点については既に馬場氏の一連の研究によって明らかになっているために、多くをそれに依ることになることを了承願いたい。

先規分銅御改メ之節御触状之写

覚

金銀掛之分銅之儀、從此以前後藤四郎兵衛仕来之处、近年猥りになり、にせ分銅用イ遣イ之由、其聞有之候、向後堅可為停止之也

一分銅壺流数拾七

但、此目四百六拾六匁五分也

此代銀貳拾五匁

一五百目之分銅壺 此代銀拾五匁

一三百目之分銅壺 此代銀拾匁

右新規拵出ス代銀也

一極印無之分銅改之一流分銅極印打候

代銀八匁

一極印無之五百目之分銅改之極印打候

代銀五匁

一極印無之三百目之分銅改之極印打候

代銀三匁

右之通候間、極印無之分銅所持之輩ハ四郎兵衛所江遣之、極印うたせ、此定之通り打貸出之可用イ遣之、若此上にせ分銅其儘蜜々<sup>(密々)</sup>於用イ遣之者、来年正月<sup>ノ</sup>以後者改之、急度可行罪科之間、京都・大坂・江戸其むきより次第分銅所持いたし極印うたせ可申者也

寛文五年

巳三月日<sup>11</sup>

これは寛文5年（1665）に京都・大坂・江戸で出された町触である。偽分銅の禁止と分銅の値段及び極印を打つ料金が定められているのが分かる。また、それとともに「金銀掛之分銅之儀、從此以前後藤四郎兵衛仕来之处」という冒頭の部分から、後藤四郎兵衛家がこの町触以前より分銅製造に関わっていたことが理解できる。

この後、享保年間になると江戸の後藤四郎兵衛家と京都の分家との間で論争が起きている。その論争の詳細については馬場氏の研究<sup>12</sup>に詳細を譲るとして、その史料の中で着目すべき文言が記されている。

一未ノ年十一月廿六日、上方筋分銅改メ申度旨、京都町御奉行所江所切之願書指上ゲ候御事

一分銅之儀者西国筋通用多御座候ニ付、古来<sup>ル</sup>京都ニ而引請、右 御用相勤申候、先年世上分銅猥リニ相成候ニ付、於江戸表右之御改メ願指上ゲ、則願之通り被 仰付、京都ニ而国々相改メ、添極印打出シ申候、然ル处近年又々世

上分銅猥リニ相成、古キ目之減リ候分銅ニ者革ニ而添卷仕、或ハ分銅ニ入越、又者銘々方ニ而銅鉛之類打込、小分銅ニ者木竹ヲ遣イ京都近在ニ而ハ似セ分銅ヲ用イ通用仕候ニ付、銀子借り引之証文ニ茂新分銅掛ケト書加江申候程ニ成来リ、依之一切新分銅売レ不申、前々私共奉蒙 仰相勤来候 御用茂難相立、家業も取失、第一者御用筋茂龜末ニ罷成、迷惑仕候、下細工人共外ニ家業も無御座候故、今日之渡世難仕、困窮至極難洪之躰ニ罷有候、依之十ケ年以来、右御改メ之義奉願度江戸表同苗四郎兵衛方江御願申上候様ニ度々申遣候処、尚存違候哉、ケ様之品願上候義相成不申候由申越候得共、打捨置申候而ハ、分銅之義者世上掛目正本ニ罷成候大切成 御用筋ニ御座候ニ付、再三申遣、又者下細工人共方茂書付指出シ申候故、猶又四郎兵衛方江何とそ願上候様ニ委細申遣候得者、証拠無之而ハ難申上候間、証拠取下シ候様ニ申越候得共、町方ニ通用所持仕候分銅私として押江取候義奉恐 上ヲ、又者所持仕候者共之難儀成候義指掛迷惑奉存、左候ハ、京都・大坂表銀遣イ之所故、分銅損シ茂多、別而猥リニ罷成候間、京住之者共方上方筋所切ニ 御奉行所江御願可申上哉と、去未ノ年四郎兵衛方江同苗勘兵衛方内談仕候処ニ相成候義ニ候ハ、御願申可然旨申越候ニ付、京都同苗共相談仕、未ノ十一月廿六日ニ京都町御奉行所江願書指上候、則右願書之写別紙ニ御座候

但、四郎兵衛方方所切ニ御願申上可然と申越候書状も京都ニ御座候御事

(後略、傍線部筆者) <sup>13</sup>

これは京都の分家側から出された文書であり、偽分銅の取締りをしたいが江戸の四郎兵衛が同意しないという趣旨である。注目すべきは傍線部の部分で「正本」という意識が垣間見られる。そして「大切成 御用筋」ということもあり、偽分銅の取締りの必要性を訴えているのである。もちろん、京都側の言い分であって、江戸の四郎兵衛側の意識ではないわけだが、後藤家分家が江戸の後藤家主導で行われていた分銅改めを京都で行なうべく立てた論理展開として着目すべき必要があると思われる。完全なる他者ではないが、分家筋から「正本」そして「大切」という語を持ち出すだけの説得性が存在しえたわけである。その後、論争は収拾を迎え、分銅改めは全国的に展開されていく。

文久元年(1861)に記された「分銅改継願書并割増値段書継願書共書拔控<sup>14</sup>」によると、「五畿内始北陸道迄、同(執筆者注：天保)十四卯年迄ニ銀通用之国々四拾九ヶ国改相済申候」とあるように、五畿内から北陸道まで、銀が通用している 49 カ国において分銅改めを行なっていることが分かる。これらだけではなく前述の寛文 5 年の町触を踏まえると、江戸を含めた全国的な改めを近世後期には少なくとも展開していたことになる。さらには弘化期から慶応期にかけて記された「分銅御用諸書留<sup>15</sup>」によると、西国では「西国并長崎筋ニ而者古分銅多く売買致用候」とあるように古分銅を使用し、今まで改め対象とされてこなかった東国でも「金銅ニ不限綿類・紅花其外品々目方懸合ニ相用候趣ニ御座候」という

ことで古分銅が使用されたために、分銅改めが行われたことが分かる。

#### b) 随筆史料に見られる分銅

上記のように公的制度における分銅の位置を見たが、ここではその分銅が如何にして社会に受け入れられていたかを随筆史料から見ていきたい。後藤家全体としては、明和 5 年（1768）から文政 5 年（1822）にかけて記された太田南畝の『半日閑話<sup>16</sup>』にて祐乗より始まる「後藤系図」が記され、明和期から寛政期に書かれた神沢杜口の『翁草』<sup>17</sup>においても同様の系図が書かれている。ただし、後藤家に関する記述の多くは彫金を担当した後藤家である。

○彫物は後藤家初代祐乗名人也、当時に到りて祐乗などといふ者は、一向弘底にして、世間に真作はなき程の事也、後藤家に三作と称するは、光乗・即乗・貞乗也、中に就て即乗を上手と称す、光乗は祐乗より四代目、貞乗は享保年中の人也、顕乗といふも上手と称する也、

これは寛政期に記された津村淙菴の『譚海<sup>18</sup>』に掲載されている文章である。誰が「上手」であるかは別として本史料にて終始しているのは彫金の後藤家であることが分かる。それだけ彫金に関する名声が流布していたことが理解できる。では、分銅自体はどうであろうか。

○金子の千枚分銅はせいの高さ四寸長七寸ほどあり、上に太閤の時の城用として勿妄用とあり、これを福島大夫数奇屋の刀掛の飛石に用いられたとなり、

これには紋はなし、銀子のは一尺余の長さにて厚さ七寸たらずとありとぞ、さて御城に古より金子の分銅三十二、銀子の分銅百二十あり、これみな先年の火事にやくるを、又改て右の数の如くに出来、これは葵の御紋あり、さて又書付は弘文院の作にて、行軍城用妄勿費用とあり、大判一枚の重さ四十目の上あり、

（中略）

小判は小判師と云もの後藤庄三郎弓手馬手にいて、小判一分の吹屋あり、それへ誰なりとも金子をかい出してやりてふかして、さて庄三郎へ云て人々のをぼへの極印一つづゝもらふて、それをゝして庄三郎に印をゝしもらふ也、古へ後藤に一人江戸へまいれとあれども江戸へゆきてなし、さて手代の庄三郎を下して仕合よし、それにより後藤は庄三郎に威勢ありて、宗室江戸へ下りたるとき御目見なりかねたが、漸なりてから今に代々するとなり

（中略）

○江戸千枚分銅、長一尺一寸、横一尺、高四寸二分

これは延宝 3 年（1675）に黒川道祐が記した『遠碧軒記<sup>19</sup>』の記事であるが、分銅の話においては千枚分銅のこのみが語られている。また後藤家として庄三郎が中心的に取り上げられ、「宗室」つまり本家とのやり取りも記されている。分銅として千枚分銅に着目しているのはこれだけではない。

左の図は檀宇が示す所なり、原図殊に大なり、今茲に縮写す、されども傍書の文

に拠て、其形状の違わざるは知るべし、  
年号に因て見れば、故の桑名老侯執政の  
時なり、

金銀御分銅六つ之内 金之方

堅差渡壺尺一寸三步 横中渡五寸貳歩  
厚さ四寸九歩

右寸法六つ共同様

御分銅鑄形 御紋[置上げ高さ二分]葵葉  
肉有 藥毛彫 文字総て掬ひ彫

貫目 四十壺貫九百四拾目 四十壺  
貫貳百八拾目 四十壺貫四百三拾目  
四十壺貫貳百六拾目 四十壺貫三百目  
以上五つ金之方 三拾貫百目 銀之  
方壺つ、但寸法六つ共同様 但し通用金  
に直し、凡六万五千九百拾六兩貳分、銀  
九匁也

右筆者 御勘定吟味役佐久間甚八殿

彫附 後藤四郎兵衛

丑八月廿四日、蓮池御金蔵元方え上納  
之節拝見之上、御分銅え当て紙を以、  
文字之居り所、寸尺とも有之俣鋪写取  
之如図 銀座 池沢信成

又長崎の人の云しは、其頃赤足金とか呼  
で、清国より渡す金ありしを、江府への  
ぼせ御貯となり居しが、新に鑄立てあり  
て、此分銅に造られしと聞けり、又其頃、  
かの分銅の絵図とて長崎にも以て流行  
き、其時彼地の奉行所にて、清金持渡  
を執扱せし者には、此物の図を拝見申つ  
けありしを、かの長崎人も密に傍觀せり  
とぞ

図は省略したが、この史料は松浦静山が  
記した『甲子夜話続編<sup>20</sup>』巻 31 に書かれて  
いる記事である。千枚分銅に関する重さだ  
けではなく寸法まで記されていることが分

かる。また、それにまつわる逸話も同時に  
書かれている。このように千枚分銅に関す  
る史料は散見されるが、市中に出回ってい  
た掛分銅等に記述は全くといって良いほど  
見られない。これは一つには市中に流通し  
ていた分銅が、当時の人にとっては当然す  
ぎるぐらい当然の存在であったことが考え  
られる。

#### 4、おわりに

社会の隅々まで分銅の存在は浸透し、分  
銅を基準とし、そしてその基準から生成さ  
れる「重さ」の概念もまた社会の隅々まで  
行き届いているかのような印象を受ける。  
しかし、果たしてそう言い切れるであらう  
か。確かに上記のような随筆作品を見てい  
くと、記述されないことからの日常性を読  
み取ることは穿った見方ではあるが可能で  
あるし、全国的な展開をしていった分銅改  
めからもそれは同様であるかと思われる。  
ただ、上記の随筆類が執筆されたのは主に  
都市部に住む人々によること、そして前述  
のように度量衡の制定が国家統制の一つを  
担ったという考えは、近代的な国民国家を  
基本とした発想であり、近世国家に対して  
簡単に適用してしまっはならない問題が  
浮上してくる。現に既述のように近世後期  
段階になって、分銅改めの範囲が東国へと  
広げられたということは、決して一律化が  
行われていたのではなく、実際には複雑な  
地方社会の特殊性を残したままの政治的な  
統合であったと考えるのが妥当であろう。  
従って分銅や近世社会における「重さ」の  
概念を、安易に近代社会へと繋げることは  
不可能である。

紅花流通などの東国（特に関東であらう



か)の社会的・経済的状況の変化などを受けての法制レベルの変容を考えると、近世初期から決定的な統一性を以って、分銅改めが行われていたとは決して言い難い。今後は様々な地域社会の中において分銅改めがどのように行われていったのかを精緻に見ていく必要があり、またそれを如何にして受け入れていったのかというのを地域社会側からの視点で見ていく必要もまた生じる。その双方向的な視点を活用することによって、より厚みのある研究が行われることが可能であろう。そしてさらには、歴史的変容の中で、近代そして現代へとどのように「重さ」の概念が受け継がれ、そして消えていったのか、その端緒を探ることも可能ではないか。

- 
- 13 東京大学史料編纂所蔵後藤勘兵衛家文書
  - 14 本報告書所収、目録番号 213
  - 15 本報告書所収、目録番号 225
  - 16 『大田南畝全集』第 11 巻、岩波書店、1988 年
  - 17 『日本随筆大成 第 3 期』吉川弘文館
  - 18 『翁草』国書刊行会、1917 年
  - 19 『日本随筆大成 第 1 期 10』吉川弘文館、1975 年
  - 20 『甲子夜話続篇』平凡社

- 
- 1 永六輔「曲尺・鯨尺を売る論理」『朝日ジャーナル』18—49、1976 年
  - 2 柏木博「江戸期におけるものの大衆化」『ユリイカ』2001 年 1 月号
  - 3 羽田正「現代歴史学の創成」『思想』982 号、2000 年
  - 4 宝月圭吾『中世量制史の研究』吉川弘文館、1961 年
  - 5 林英夫『秤座』吉川弘文館、1973 年
  - 6 小泉袈裟勝『ものさし』法政大学出版局、1977 年、同『枡』法政大学出版局、1980 年、同『秤』法政大学出版局、1982 年
  - 7 馬場章「近世日本の計量統制」『歴史学研究』690 号、1996 年（以下、馬場論文A）、同「後藤四郎兵衛家の分銅家業」『計量史研究』19 巻 1 号、1997 年（以下、馬場論文B）、同「後藤四郎兵衛家の三家業—彫金・大判座・分銅座—」『金工後藤家による御家彫の実証的研究』2003 年（以下、馬場論文C）
  - 8 馬場論文A参照
  - 9 馬場論文A参照
  - 10 馬場論文C参照
  - 11 東京大学史料編纂所蔵後藤勘兵衛家文書
  - 12 馬場論文B参照